沼

芥川龍之介

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

昼か、夜(よる)か、それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺(あをさぎ)の啼く声がしたと思つたら、蔦葛(つたかづら)に掩(おほ)はれた木々の梢(こずゑ)に、薄明りの仄(ほの)めく空が見えた。

沼にはおれの丈(たけ)よりも高い芦(あし)が、ひつそりと水面をとざしてゐる。水も動かない。藻(も)も動かない。水の底に棲(す)んでゐる魚も——魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水の匂(にほひ)や芦(あし)の匂ひがおれの体を

包んだ事もある。と思ふと又枝蛙（えだかはづ）の声が、蔦葛（つたかづら）に蔽（おほ）はれた木々の梢から、一つ一つかすかな星を呼びさました覚えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈（たけ）よりも高い芦が、ひつそりと水面をとざしてゐる。おれは遠い昔から、その芦の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でもおれの耳には、Invitation au Voyage の曲が、絶え絶えに其処（そこ）から漂（ただよ）つて来る。さう云へば水の匂や芦の匂と一しよに、あの「スマトラの忘れな艸（ぐさ）の花」も、蜜のやうな甘い匂を送つて来はしないであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧(あこ)がれて、蔦葛(つたかづら)に掩はれた木々の間(あひだ)を、夢現(ゆめうつつ)のやうに歩いてゐた。が、此処(ここ)に待つてゐても、唯芦と水とばかりがひつそりと拡がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな艸(ぐさ)の花」を探しに行(ゆ)かなければならぬ。見れば幸(さいはひ)、芦の中から半(なか)ば沼へさし出てゐる、年経(としへ)た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作(ざうさ)なく水の底にある世界へ行(ゆ)かれるのに違ひない。

おれはとうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。

おれの丈（たけ）より高い芦が、その拍子（ひやうし）に何かしやべり立てた。水が呟（つぶや）く。藻（も）が身ぶるひをする。あの蔦葛（つたかづら）に掩（おほ）はれた、枝蛙（えだかはづ）の鳴くあたりの木々さへ、一時はさも心配さうに吐息（といき）を洩（も）らし合つたらしい。おれは石のやうに水底（みなそこ）へ沈みながら、数限りもない青い焔が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。

おれの死骸は沼の底の滑（なめらか）な泥に横（よこた）はつてゐる。死骸の周囲にはどこを見ても、まつ青（さを）な水があるばかりであつた。この水の下にこそ不思議な世界があると

思つたのは、やはりおれの迷(まよひ)だつたのであらうか。事によるとInvitation au Voyageの曲も、この沼の精が悪戯(いたづら)に、おれの耳を欺(だま)してゐたのかも知れない。が、さう思つてゐる内に、何やら細い茎が一すぢ、おれの死骸の口の中から、すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつと届いたと思ふと、忽ち白い睡蓮(すゐれん)の花が、丈の高い芦に囲まれた、藻の匂のする沼の中に、的皪(てきれき)と鮮(あざやか)な莟(つぼみ)を破つた。

これがおれの憧(あこが)れてゐた、不思議な世界だつたのだな。――おれの死骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮(すゐれん)の花を何時(いつ)までもぢつと仰ぎ見てゐた。

（大正九年三月）

す。